

風姿花伝第三、問答条々

五 能の得手々々

問。能に得手くとて、殊の外に劣りたる為手も、一向き上手に勝りたる所あり。これを、上手の為ぬは、叶わぬやらん、また、為まじき事にて為ぬやらん。

〔口訳〕問。能芸に於て、人それぞれに得意とする所があつて、全般的にいへば殊の外に劣つて居る為手でも、その得手の一方面だけは、上手よりも勝つて居るところを持つて居る者があります。これを上手な為手が学んで我が芸としないのは、出来ない為でありますか、或は又、してはいけない為にしないのでありますか。

答。一切の事に、得手と

て、生得得たる所あるものなり。位は勝りたれども、是は叶わぬ事あり。さりながら、これもたゞ、よきほどの上手の事にての料簡なり。まことに、能と工夫との究まりたらん上手は、何か何れの向きをも為ざらむ。されば、能と工夫とを究めたる為手、万人が中に一人も無き故也。無きとは、工夫は無くて、慢心ある故なり。抑、聖人

答。能に限らず、一切の事に、得手々々といつて、生れつき得意な所があるものだ。位から言へば上位の為手でも、下手の得意芸に對しては及ばぬ事がある。しかしながら、これもただ普通の上手といはれる程度の為手についての考へ方に過ぎない。真に芸能の方面にも工夫公案の方面にも究めつくした上手であるならば、如何なる方面の芸も必ず演じ得る筈である。下手の得意芸に及ばぬといふのは、能と工夫との両面を究めつくした為手といふものは、万人の中に一人も無いから、

そのために起る現象なのである。自分が、万人の中に一人も無いと言つたのは、誰人も、工夫をこらすことをして、自分で自分の芸に慢心する心があるからである。諺にも「聖人の一失、愚人の一得」といふのがある。上手だつて欠点はあるし、下手だつて長所は必ずあるものなのだ。所がこれを真に見る人がない。又当人もそれを自覚しないで居る。上手な者は自分の名望を憑み、自分の芸達者に蔽はれて、自分の欠点を知らないである。又下手な者は、工夫をこらすといふ事をやらないから、

の一疾失^失、愚人^得の一徳^失と申事^{まうすこと}あ
り。上手^失にも悪^失き所^失あり、
下手^失にも善^失き所^失、かならず
有^失る物^失也。是^失を見る人^失もな
し。主^失も知^失らず。上手^失は名
を憑^失み、達者^失に隠^失されて、
悪^失き所^失を知^失らず。下手^失は、
工夫^失なければ、悪^失き所^失を
も知^失らねば、善^失き所^失のたま
く有^失るをも、弁^失へず。さ
れば上手^失も下手^失も、互^失ひに
人に尋^失ぬべし。乍^失去^失、能^失と
工夫^失を究^失めたらむ者、これ
を知^失るべし。

自分の欠点の自覚がない。そんな状態
だから、自分にたまたま長所があつて
も、それを知らないでゐる。かやうな
のが世の有様だ。だから、上手も下手
も、互に他人の意見を聞いて、反省工
夫の助けとしなくてはならない。しか
し、眞に能と工夫とを究めつくした為
手ならば、これを知ることが出来ると
思ふ。

いかなる可笑しき為手なりとも、善^よき所ありと見ば、上手もこれを学^{まな}ぶべし。こ^よれ第一の手だてなり。若^{もし}よき所を見たりとも、我より下手をば似^にすまじきと思ふ。諍^{じやう}識^{しき}あらば、その心に繫^{おも}け。縛^{ばく}せられて、我わろき所とも、いかさま知るまじきなり。是^{これ}則^{すなはち}究^きめぬ心なるべし。又、下^へ手^たも、上手の悪^{わろ}き所若^もし見えば、「上手だにも悪^{わる}き所あり、況^{いは}んや初心^{しょしん}の我なれば、さこそ、

どんなにつまらぬ為手の芸でも、あすこは良い所だと見たならば、上手といはれる為手も、これを学ぶべきである。これは自己の芸を伸ばしてゆく第一の手だてである。良い所を見ても、自分よりも下手な者の芸は似せまいなどと思ふ諍識が若しあつたならば、その人は直に自分の諍識によつて自分が束縛せられて、それが自分の大欠点だといふことも、恐らく気づかないだらう。かやうなのが即ち「工夫を究めぬ心」なのである。又下手な者も、万一路上手な人の芸の欠点に気がついたなら

悪き所多かるらめ」と思ひて、是を恐れて、人にも尋ね、工夫を致さば、弥稽いよくけい

古になりて、能は速く上がるべし。若さはなくて、我は、彼体あれていに悪き所をば、為

まじき物をと、慢心まんあら

ば、我善き所をも、真実知らぬ為手なるべし。吉所よきところを知らぬは、悪き所をも善し

と思ふなり。さるほどに、

年は行けども、能は上がらぬなり。これ則すなはち、下手へたの心なり。

をも良いかのやうに思ふものである。そんな風だから、いくら年を経ても能は上達しないのである。これ即ち下手の根性なのだ。

されば上手にだにも、諍慢じやうまん

あらば悪かるべし。況んや、

叶かなはぬ諍識じやうしきをや。能々公案よくくこうあん

して思おもへ、上手は下手の手

本、へたは上手の手本なり

と工夫すべし。下手の善よき

所ところを取とりて、上手の物数ものかずに入い

る事、無上至極ことわりの理なり。

人の悪き所を見るだにも、

我手本わがてほんなり。況んや、善よき

所をや。稽古は強つよかれ、諍じやう

識しきは無かれとは、是なるべ

し。

だから、上手な者でさへも諍慢心があれば、それは大変いけないことであ

る。況んや叶はぬ下手者の諍識に於てをやである。十分に工夫省察して見

よ、上手は下手の手本、下手は上手の手本だと思つて、工夫をこらすが良い。

下手の者の良い長所を採り学んで、上手がこれを自己の芸能の中に攝取することは、無上至極ことわりの理りである。他人

の悪い所を見ることでさへ、自分の欠点を直す手本になるのだ。況んや良い所を見てこれを学ぶ事が、如何に良き手本であるかは説明を要しないであります。花伝書の序に、「稽古は強かれ、諍識は無かれ」と戒めてあるのは、この点についての教戒であらう。

此の段の眼目は「能と工夫とを究めつくす」といふ点にある。それを実行に移す時に、妨げとなるものは諍識や慢心である。所がこの諍識や慢心の無いものは、悲しい哉万人の中に一人も無いのである。我々自身冷静に我身をふりかへつて見た時、正視するに堪へないこの種の雑念が、我々の心の底に蠢動しつつあることを感じる。これは免れ難い人間の運命だと思ふ。ただこれを跳梁せしめないで置くといふことが、許されるかと思ふ。陽明が山中の賊を破るは易いが、心中の賊を平げるは難いと歎息したといふ。陽明すら然りだ。

問題は卑近な所から出てゐる。下手な為手の長所を、上手が一向に真似ようとしないのは、どうしたわけかといふ質問である。学ぶべきものがありながら学ばないといふのは、諍識のわざである。自分がすぐれてゐると自惚れる慢心のわざである。諍慢の心が自分の明を蔽ふと、自分の欠点が見えなくなる。そればかりでない。「慢心あらば、我が善き所をも真実知らぬ為手となる」といふ。この一語は実に深遠である。一寸考へると、自惚れるといふことは、自己の良い所が目につきわかりすぎてゐる故に、起るかのやうに思はれる。いくら慢心しても、自分の長所を見失ふといふやうなことは無からうとも思ふ。しかし、

世阿弥は「良き所を知らぬは悪き所をも善しと思ふなり」といふ。これをおにして「悪き所をも良しと思ふは、良き所を知らぬなり」とすれば、非常に明かである。自己の欠点に目がつかぬのではなくて、欠点を欠点と自覚せず、それで良いものの如く思ふ心は、冷静に反省して見ると、良き所を知らぬ歪んだ心であるのだ。慢心の害毒はかくまでに恐るべきものである。

これから逃れて正道を進むには、ただ工夫省察の一途あるのみである。「上手は下手の手本、下手は上手の手本なり」と工夫をこらすにある。

「人の悪き所を見るだにも我が手本なり、況んや善き所をや」である。この心をもつて修行したならば決して邪慢にはなり得ないと思ふ。